

日韓交流前後における日本語教育学専攻学生の意識変容

青柳にし紀
信州大学人文科学研究科

1. はじめに

日本語教育に携わる者にとって、日本語学習者の祖国の文化、歴史などを理解し、学ぶことが不可欠であることは言をまたない。

海を隔てて日本に隣接する韓国は、近年になって「日本語学習熱」の高まってきた国の一つである。日本人にとって韓国は「近くて遠い国」と呼ばれることがあるように、韓国の文化、歴史、韓国人の考え方を実際に理解している人はあまり多くない。

沖ゼミ（信州大学人文学部日本語教育学沖裕子研究室）では、2000年3月上旬、「韓国研修旅行」を実施した。参加した日本人学生10名のうち、既に海外旅行の経験を持っている学生は少なくなく^{注1}、中には複数回の経験者もいたが、韓国旅行に限れば全員がはじめてであり、韓国語を履修した経験者もほぼ皆無であった。^{注2}

旅行参加者全体の目的は「対日感情と韓国文化とを肌で体験する」「日本語教育の現状を知る」という2点に置いた。これに加えて各学生も、それぞれの明確な目標を持つこととして、旅行に臨んだ。

日本語教育学を専攻し、日本語教育や異文化間コミュニケーションに興味を持つ学生が「韓国研修旅行」に参加したことは、長い両国の歴史の中で、戦争の時をも経た両国の関係を改めて建設的に見直す契機になった。とくに、独立記念館見学では韓国の対外的な歴史観を学び、日本語授業見学では実際の授業風景を体験するなど得られた意義は大きい。

旅行を終えて、参加した学生は目的達成による旅行の成果を得たばかりではなく、参加者全員に意識面でさまざまな変容を遂げていることが窺えた。この状況を踏まえ、本論は、韓国研修旅行がどのような意義を有するものであるか、参加した日本語教育学専攻学生にどのような意識変容が見られるかを考察することを目的とする。

本論を作成するにあたり、参加学生の旅行前後の意識変容を解明するためのアンケート調査を実施したが、回答者全員の韓国に対する評価が旅行前後で好転すると同時に、意識変容に関しても自認していることを示唆する結果が得られた。^{注3}

2. 「韓国研修旅行」の概要と意識調査

「韓国研修旅行」の概要を以下に記す。

2.1. 旅行の経緯

- (1) 旅行期間：2000年3月6日（月）～2000年3月9日（木）
- (2) 目的地：大韓民国
ソウル市、京畿道、忠清南道の3カ所
- (3) 発案者：沖裕子（信州大学人文学部助教授）
姜錫祐（カトリック大学校外国語学部助教授）
- (4) 旅行参加者：信州大学人文学部日本語教育学専攻 11名
内訳 大学院2年1名、学部4年5名、3年2名、2年3名
（上記のうち、信州大学人文学部日本語教育学専攻3年の韓国人留学生閔淳奎さん =ソウル市在住= が先行帰国、合流。渉外、通訳担当）
- (5) カトリック大学校参加者：カトリック大学校外国語学部日本語
11名
内訳 3年10名、2年1名

2.2. 旅行の目的

- (1) 歴史的に日本と密接な関わりを持ってきた韓国の人々の振幅の大きい対日感情と韓国文化とを肌で体験すること
- (2) 韓国における日本語教育の現状を知ること

2.3. 旅行日程

3月6日（第1日目）

- 09：02 JR 松本駅発
- 11：02 JR 名古屋駅着
- 11：10 同駅前発
- 11：50 名古屋空港着
- 14：30 同空港発（ASIANA OZ121便）
- 16：20 韓国ソウル空港着（閔淳奎さん、カトリック大学校生の歓迎）
地下鉄で移動
- 18：00 ソウル市テハジャン着（宿泊先 ホテル「テーハー」）
- 18：30 夕食（於 焼肉料理店「イドン・カルビ」）
- 20：30 歓迎会（於 ホテル「テーハー」103、104、105号室）
- 23：00 就寝

3月7日(第2日目)

- 07:00 起床
- 07:30 朝食
- 09:00 ホテル発
- 10:30 独立記念館着、見学 (パートナーのカトリック大学校生同行)
- 17:00 同記念館発
- 18:30 ソウル市街着
- 18:30 夕食 (於 中華料理店「日月ソソ」)
- 21:00 ホテル着
- 22:00 就寝

3月8日(第3日目)

- 06:30 起床
- 07:00 朝食
- 08:30 ホテル発
- 11:00 カトリック大学校着、見学
- 12:00 昼食
- 13:30 討論会 (議題「独立記念館について」、於 カトリック大学校誠心
研修室)
- 15:00 韓服親善試着、交流会 (於 同研修室)
- 16:00 夕食 (於 韓国料理店)
- 17:00 日本語授業見学
- 19:00 カラオケ
- 22:00 東大門見学、買い物

(3月9日)

- 03:00 ホテル着
- 03:30 就寝

3月9日(第4日目)

- 06:30 起床
- 07:00 朝食
- 08:30 ホテル発
- 10:00 ソウル空港着
- 12:00 同空港発 (ASIANA OZ122 便)
- 13:30 名古屋空港着
- 15:00 JR 名古屋駅着
- 16:00 同駅発
- 18:30 JR 松本駅着
- 20:00 同駅解散

2.4. 旅行後の意識調査

2.1.の旅行を経て、参加学生の意識変容がどのようなものであるかを追究するために、帰国約2週間後に「日韓交流前後における日本語教育学専攻学生の意識調査」を行った。

要領は下記のとおりである。

- (1) 調査期間：2000年3月20日(月)～2000年3月27日(月)
- (2) 調査対象者：「韓国研修旅行」の日本人学生参加者中、論者を除いた信州大学日本語教育学専攻学生9名。全員が女性、20歳～22歳。出身地は新潟県から沖縄県まで広範囲に及ぶ^{注4}
- (3) 調査方法：調査対象者にアンケート方式の調査票配布、3月27日回収
- (4) 調査票の内容：
 - I. 調査対象者の旅行体験に関する内容
 - II. 「韓国研修旅行」に関する内容
 - III. 調査対象者自身の内省により、「韓国研修旅行」前後の意識変容に関する内容

Iは旅行参加学生の過去の旅行に関するデータを得るため、IIは今旅行の意識の変容を調べるため、さらにIIIは意識変容について記述による回答を得るために設けたもので、これらにより今旅行参加者の意識を把握しようとした。とくに、IIは、意識変容の具体性を追究するため、「韓国の文化・言語・国家制度」、「カトリック大学校生と接して」、「日本語の授業を見学して」、「日韓問題に関して」、「自分が外国人であることについての意識」それに「旅行全体を通して」という6分野・51項目の質問で構成した。

3. 2つの見学の意味

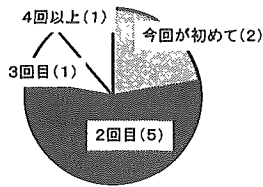
本論では、2.4.の要領で実施した意識調査の結果を引用、あるいは参照して、今旅行を象徴する独立記念館見学と日本語授業見学とを通じて旅行参加者の意識がどのように変容したか、また、その意義を探るため検証することとする。

その前提として、旅行参加者の過去の海外旅行経験と韓国に対する関心とを略述する。

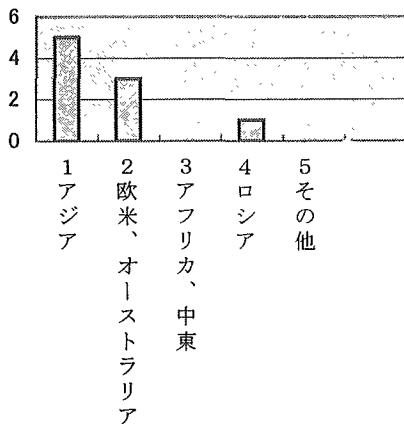
本意識調査によると、旅行参加者のうち、2名を除いて全員がこれまでに海外旅行経験がある(グラフ1)。また、ほぼ全員が2つ以上の外国語履修経験があり、その種類は、英語、中国語、スペイン語の順に多かった(グラフ3)。これらのデータから、概して旅行参加者の海外への関心は高いといえる。このなかで、韓国の旅行経験者は皆無(グラフ2)、韓国語を履修した経験の

ある学生は、わずかに1名が大学の講義で「前期のみ」履修しただけである（グラフ3）。

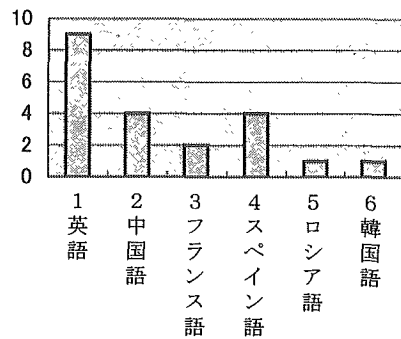
グラフ1. 対象者の海外旅行経験 <回数>



グラフ2. 対象者の海外旅行経験 <地域>

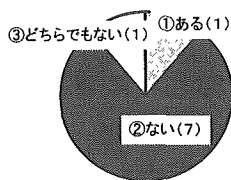


グラフ3. 対象者の外国語履修経験<有無>

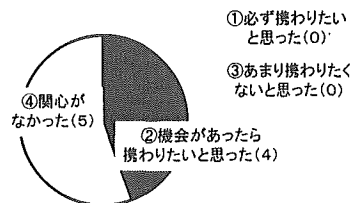


さらに、旅行参加者が旅行前持っていた韓国への関心の一部分を見ると、グラフ4、グラフ5が示すように、旅行参加者の韓国における留学や日本語教育への関心は高いとはいえない。

グラフ4. 「47.旅行前、韓国に留学したいと考えたことがありますか？」



グラフ5. 「49.旅行前、韓国で日本語教育に携わりたいと考えたことがありますか？」



韓国への関心が高くない背景には、さまざまな要因が存在しようが、ここではその1つを考えたい。

論者の推測の域を出ないが、机上で漠然と日本語教育に携わりたいと考えていても実感を得るに至らず、刺激も弱いのに反して、現実には韓国に行き、

その風土に触れ、人々に会わないことには、韓国での具体的な日本語教育は想起できまいということである。換言すれば、韓国という国に「身を置いてみる」ことではじめて実生活の感慨が生まれ、韓国への留学や日本語教育に関心が強化されると思われる。

この仮定に立てば、日本語教育学専攻学生にとって、本研修旅行は韓国の実像、実態に直接触れられる画期的な機会であるといえる。本研修旅行を機に、旅行参加者の意識が変容していくことが確信される。

2.2.で述べた本旅行の目的が包含する意義はこの点にある。すなわち、学生の意識変容を結晶させる「対日感情と韓国文化」とを体験でき、「日本語教育の現状」を学ぶことができる。

前述のごとく、3泊4日の旅程のうち、中心活動であった「独立記念館見学」「カトリック大学校見学」の2つの体験は意義深く、予想通りの成果をあげた。

以下、この2つの見学をモデルに調査結果を実証的に織り込んで、旅行参加者の意識の変容を考察したい。

4. 独立記念館見学

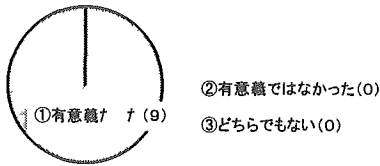
独立記念館は、「1982年日本での歴史教科書の歪曲問題」がきっかけとなり、「独立運動に参加した人たちの業績を正しく伝えようという目的」で計画され、5年後の1987年に建設された記念館である。館内は7つの展示館と円形映画館で構成され、展示館には国の始まりから現代に至るまでの膨大な韓国歴史の資料が所蔵、あるいは陳列されている。とくに第3展示館は「日帝侵略館」で、「日本帝国主義」が朝鮮半島を侵略していった過程や統治時代の実態が紹介されている。同展示館の見学コース後半に、「日本官憲」が朝鮮人に対し行った拷問現場が、精巧な背景と暗い照明、ロウ人形などで再現されている。^{注5}

館内では、カトリック大学校生と日本人学生とがペアとなり、日本人学生がカトリック大学校生の説明を受けるかたちで見学をすすめた。ここでは、当然ながら日本人学生は加害者としての立場を意識させられざるを得なかった。

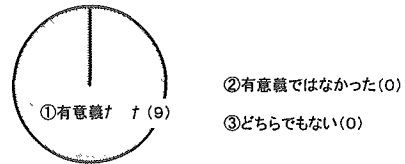
独立記念館見学の翌日、カトリック大学校誠心研修室を借り、記念館の見学内容を議題に全体で3グループ、各グループ6名～8名という構成の討論会を行った。前日のペアは必ず同じグループに属していたので、それぞれ見学当時の模様や感想などを確認し合うことができ、「一緒に回りながら、お互いにどのようなことを考えていたか知ることができ、よかった(C)」とする。

意識調査の結果では、独立記念館見学とその翌日の討論会については、回答者全員が「有意義だった」と評価している(グラフ6、7)。

グラフ6. 「30.独立記念館見学はあなたにとって
有意義でしたか？」



グラフ7. 「31.カトリック大学校生との討論は？」

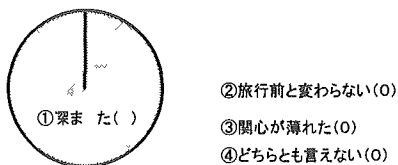


見学内容の理解度は「韓国人学生の方が、深い理解をしてきている (A)」ものの、両国の学生とも、「戦争の話と現在の日韓の関わりに接点あまり感じられないという感覚 (D)」を持っており、「若い人々の戦争に対する意識の低さ (I)」が窺えた^{註7}。そのため、もっと「歴史的事実を知る必要がある (C)」となった。半面、韓国人学生の方が日韓問題について深い知識を持っているのに対し、日本人学生が「加害者」としての立場を知らず、独立記念館見学によってはじめて「加害者」としての立場を知ったことに関しては、「過去のことをもっと学ぶべきだ」という感覚は、日本人の側の方が強かった (I)」という回答もあった。

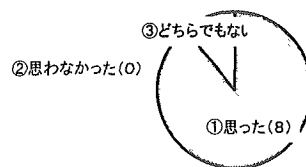
今後の日韓国交の在り方では、「過去の歴史を教訓にして、新しい関係を築いていくべき (A)」、「日韓交流の発展をねがう (I)」など討論全体が両国の関係を建設的に捉える方向に収斂している結果を得た。

「日韓交流の発展」という結論を導き出したカトリック大学校生との討論には、全員が「日韓国交に対する関心が深まった」(グラフ8) と答え、「旅行前と変わらない」「関心が薄れた」という回答は皆無であるなど絶対的に日韓国交に対する関心を深め合った。

グラフ8. 「33.カトリック大学校生との討論を通じて、日韓国交に対する関心は深まりましたか？」



グラフ9. 「34. カトリック大学校生との討論を通じて、今後、日韓国交を深める努力をしたいと思いますか？」



以上の調査結果から独立記念館見学と見学後の討論とは、韓国人の歴史観を知る上で非常に有効であったと考える。

5. 日本語授業見学

見学機会を得た日本語授業の概要は、以下のとおりである。

- (1) クラス：カトリック大学校外国語学部日本語科3年
- (2) 授業時間：3月8日（水）5：00 p.m.～6：00 p.m.
- (3) 担当教官：津崎浩一（カトリック大学校言語文化学部客員教授）
- (4) 授業科目：作文
- (5) 学習者のレベル：初級修了程度
- (6) 出席者：18名程度

この授業では、当初「作文」を予定していたが、日本人側の見学者が教官、学生合わせて12名に達し、多人数の受け入れになること、ほぼ全員の見学者が日本語母語話者であることから、急遽コミュニケーションゲームを行うことに変更された。

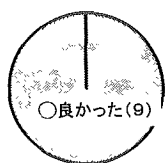
学習者側と日本人見学者側とが、1チーム3名ずつの両側合わせて10チームを結成。見学者側4チームが出題者、学習者側6チームが解答者となった。

ゲームは「うそつきは誰？」で、出題者側の各チーム3名がそれぞれ同文を日本語で繰り返し、3名の中で「うそをついていないのは誰か」を解答させるものであった。4チームはそれぞれ「私は恋人がいません。」「私は中国へ行ったことがあります。」「私は高校の時、弓道部でした。」「私は半年前、10kg太っていました。」と出題した。

1ゲーム4題のみで1時間の授業が終了したが、学習者は活発に解答を試みて発言も多く、見学者側には日本語を学ぶ学生たちの意欲が伝わってきた。見学者が授業に参加できたことは今後の参考になる点で収穫も多く、有意義で建設的な授業であった。

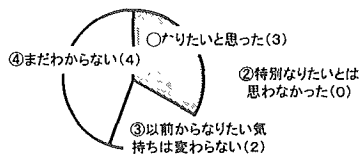
意識調査においては、全員が見学して「良かった」とし（グラフ10）、この授業見学を契機に「日本語教師になりたい」と思った学生が3人もいたことは注目に値する（グラフ11）。

グラフ10. 「26.日本語の授業を見学して良かったか？」



- ②良いとは言えない(0)
- ③どちらでもない(0)
- ④わからない(0)

グラフ11. 「27.授業を見学することによって日本語教師になりたいと思ったか？」

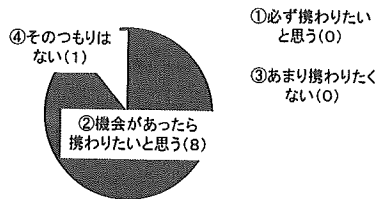


また「29.実際に授業を行うとしたら、どのようなことを教えたいか」という質問に対しては、「身近な習慣の違い (B)」「日本の文化 (スポーツ、食べ物、その他) (A)」「流行的なこと (G)」のほか、「(～ていうかー。など) フランクな私たちがふだん友達と話すときに使う言葉を教えてみたい、あいづちのバリエーションなども (F)」など具体的な案も想起できた様子である。調査対象者に共通していえることは、授業見学の影響からか「授業が楽しいものになればいい」という意見であった。

旅行中、日本語教育を行った経験のない学生がカトリック大学校生と接したことは日本語学習者に対する配慮を体得することにもつながった。「24.カトリック大学校生との会話はふだんと同じか」という質問に対し、「相手がネイティブではないので、ふだんは気にしない話のスピードや難しい単語を使用しないなど気を使って話した (G)」「できるだけやさしい言葉を使う (F)」。「38.今度、カトリック大学校を訪問して別の学生に会うとしたら、日本についてどのような説明をするか」という質問には、「分かりやすい言葉を使って」「(旅行前の考えと変わらないが、) 写真や雑誌などの小道具を工夫、用意しよう」という回答が見られた。

旅行前「49.韓国での日本語教育に携わりたいと考えたことがありますか?」という質問に対し、9名中4名が「機会があったら携わりたいと思った」と回答し、残りは「関心がなかった」としていたのに対し^{注6}、旅行後の同じ質問では「機会があったら携わりたい」と回答した人は8名までに増えた。

グラフ 12. 「50.現在、韓国で日本語教育に携わりたいと考えますか?」



以上から、教壇に立って教えた経験の少ない日本語教育学専攻学生にとって、具体的な日本語教育のイメージを持つためにも、日本語教育の行われている現場を見学、体験することは必須のことに思える。

6. 旅行参加者の意識変容

前述の 4.、5.から旅行参加者の意識変容がどのようなものであるかが具体化された。すなわち、独立記念館について見学前の回答が得られなかった不備はあるものの、見学後は全員が日韓国交に対する関心が深まったと回答したこと、また、カトリック大学校見学について、機会があったら「韓国の日

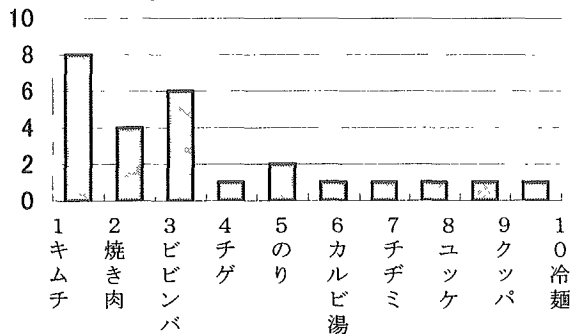
本語教育に携わりたい」と答えたのは見学前4名であったのに対し、見学後は2倍の8名までに増えている。これらは調査結果の一部であるが、旅行参加者の意識は全般に日韓両国にとって好ましいものに変化していることが浮き彫りにされた。

この意識変容は、文化的体験や生活体験など、研修旅行全体を通してさまざまな分野にも見られる。

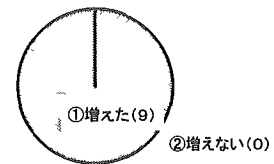
韓国の暖房設備であるオンドルは「適度な暖かさ (D、F、H)」が非常に良い、「日本にも欲しい (C、E、I)」、韓服 (ハンボック) も「ふわふわ軽くて、華やかで、嬉しかった (F、G、I)」「親しみを感じた (B)」など、はじめて接する異文化に対して好意的な評価を与えている。

食べ物では、旅行前「キムチ」「焼き肉」「ビビンバ」程度しか知らなかった韓国食について (グラフ 13)、全員が「知っている料理が増えた」とし (グラフ 14)、具体的には「カルビ湯」「スンデ」「トッポッキ」など日本では味わうことができない未知の数多くの韓国食を挙げている。

グラフ 13. 「11-1.旅行前、知っていた韓国料理は？」

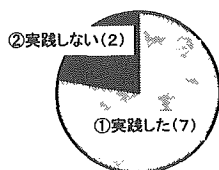


グラフ 14. 「11-2.旅行後、知っている韓国料理は？」

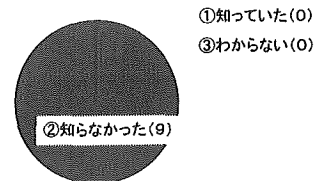


食事に関する韓国の習慣を知り、積極的に実践してみた学生も多い (グラフ 15)。旅行前知らなかった食器 (グラフ 16) は、4日間実際に使用したうえで「重い箸が好きになった」「ご飯の器がかわいい」などと評価する。

グラフ 15. 「11-3.韓国の学生と同席し、韓国食を取ったとき、食事に関する習慣 (左手を使わない/「ごちそうさま」といわないなど)を実践しましたか？」

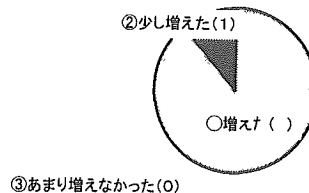
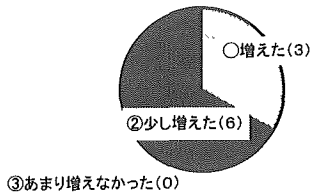


グラフ 16. 「11-4.旅行前、韓国の食器がどのようなものか知っていましたか？」

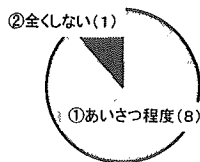


旅行全体でみると、旅行後は韓国に関する知識は「増え」（グラフ 17）、韓国への興味も「増えた」（グラフ 18）、旅行前あいさつ程度しか勉強しなかった韓国語（グラフ 19）については、旅行後には今後「勉強したい」（グラフ 20）となった。旅行前には「ガイドブックしか読んでいなかった」と答えた学生たちが、旅行後は「日本の韓国に対する侵略について」「歴史の教科書」など日韓問題に関わる本を読みたいとする回答を得た。

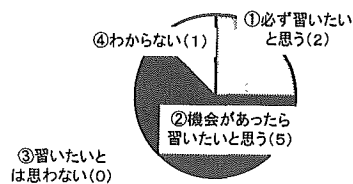
グラフ 17. 「41. 韓国に関する知識は増えたか？」
 グラフ 18. 「42. 韓国への興味は増えたか？」



グラフ 19. 「43. 旅行が決定してから韓国語をどのくらい勉強しましたか？」



グラフ 20. 「44. これから韓国語を習いたいですか？」



調査結果は概して韓国に対して好意的なものであり、旅行前に比べて韓国に親近感が増していることを示唆している。

7. おわりに

以上、韓国研修旅行を終えて、本研修旅行に参加した日本語教育学専攻学生の意識が旅行前後でどのように変容したか、また、本研修旅行の意義についても述べてきた。本論作成に際して行った意識調査の結果、旅程のうちとくに「独立記念館見学」「日本語授業見学」は所期の目的を達成したものであることは言うまでもないが、他の体験においても、学生の意識が旅行前後で大きく変容したことを確認できた。本研修旅行は全体として「有意義であった」と位置づけることが可能で、調査結果がそれを裏付けている。

このような成果を得ることができたのは、まず、個人旅行としてではなくゼミ旅行として企画、実行したことにより、旅行中も同じ目的を持った者同

士が互いに意識を高め合い、支え合うことができたという点、また、現地で旅行参加者を迎え入れて協力してくれたカトリック大生と日韓交流が実現できたという点にあるといっても過言ではないだろう。

現実を概観すれば、日韓間には友好親善関係が確立されている一方で、過去の悲惨な歴史から生まれた長い間の確執も依然残されており、今もこの状態は改善したとは言い難い。旅行参加者に対する旅行中の韓国人の反応を尋ねたところ、ほぼ全員が「良い」「嫌な」の両反応を受けたとし、現在も韓国には親日派と非親日派とが共存している。

この現実に対し、調査の全貌から得られる日本人学生の対韓国意識は、旅行後では明らかに向上し、新しい期待も強く見て取れる。中でも特筆すべきは「韓国の人たちは、皆が日本に対して悪いイメージを持っていると思いこんでいたが、実際は日本に対して、そのような感情を持つ人が少ないことを知った。」「韓国の人々は日本を恨んでいる、というイメージがすこし薄れた。たしかにそういった人もいるが、未来に目を向け、日韓の交流に積極的な姿勢を示している人も多くいることがわかった。」の回答である。

調査の最後「51.もう一度韓国へ行きたいと思えますか」の項目では全員が「行きたい」という回答を提出している。ゼミ旅行としての本研修旅行が、参加学生にとって何らかのかたちで今後役に立てばと考える。

【注】

注1 意識調査 I-2「対象者の海外旅行経験」集計結果。(グラフ1参照)

論者の海外旅行経験は、以下の通り。

海外旅行経験

今回の韓国研修旅行はオーストラリア、アメリカ合衆国グアム島に続き、3度目の海外旅行に当たる。従って、韓国への旅行経験は、今回が初めて。

注2 意識調査 I-3「対象者の外国語履修経験」集計結果。(グラフ3参照)

論者の外国語履修経験は、以下の通り。

外国語履修経験

12歳～21歳まで第1外国語として英語を履修。信州大学人文学部1年に在学中、第2外国語としてドイツ語を専攻。韓国語の履修経験はなし。

注3 意識調査全体の回答を総合的に見て判断した。

注4 各調査対象者の性別、所属、学年、出身は以下のとおり。なお、本論における「(アルファベット大文字)」は、各調査対象者の言葉を引用したものである。

	性別	所属	学年	出身
調査対象者A	女性	人文学部日本語教育学	4年	神奈川県逗子市
調査対象者B	女性	人文学部日本語教育学	4年	埼玉県大宮市
調査対象者C	女性	人文学部日本語教育学	4年	新潟県南蒲原郡
調査対象者D	女性	人文学部日本語教育学	4年	山口県長門市
調査対象者E	女性	人文学部日本語教育学	4年	京都府京都市
調査対象者F	女性	人文学部日本語教育学	3年	石川県珠洲郡
調査対象者G	女性	人文学部日本語教育学	2年	東京都八王子市
調査対象者H	女性	人文学部日本語教育学	2年	沖縄県豊見城村
調査対象者I	女性	人文学部日本語教育学	2年	新潟県北蒲原郡

注5 ガイドブック『地球の歩き方』参照。

注6 旅行前の関心が高くなかった例として、本論3.グラフ5に挙げたとおり。

【付記】

本論は、2000年3月20日(月)～2000年3月27日(月)に行った「日韓交流前後における日本語教育専攻学生の意識調査」をもとに作成したものです。調査にご協力くださった信州大学人文学部日本語教育学専攻9名の学生の皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。

なお、調査の契機となった韓国研修旅行は、見解を広める大変貴重な学習の場となりました。このような機会を与えてくださった沖裕子先生、姜錫祐先生、また日本語授業見学を快く承知していただきました津崎浩一先生に心より御礼申し上げます。

(2000年3月)